

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 28 日現在

機関番号：34431

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K18636

研究課題名（和文）認定こども園における園内・園外研修モデルの構築

研究課題名（英文）Construction of inside and outside training models in certified centers for early childhood education and care

研究代表者

橋川 喜美代（Hashikawa, Kimiyo）

関西福祉科学大学・教育学部・教授

研究者番号：20189468

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）： 幼稚園教諭と保育所保育士の記録から子ども理解や保育を見る視点に着目し、幼稚園と保育所がこれまでの文化の壁を越え、認定こども園において実践していくための研修方法を考案した。まず市の全保育者を対象に調査を行い、幼稚園教諭と保育士間の相互理解の基盤であり、子ども理解の視点となる「保育者の共感的かかわりの態度・姿勢」尺度を作成した。この尺度を用いて、認定こども園への移行過程に見られる子ども理解の変容を分析し、その実効性を探りながら、認定こども園における園内・園外研修のモデルを構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、「ラーニング・ストーリー」を適用した幼稚園教諭と保育士の記録から保育を見る視点、ならびに子ども理解の変容を明らかにしながら、認定こども園での園内・園外研修モデルを構築した。得られた研究成果をリーフレット「認定こども園・幼稚園・保育園など保育施設における園内・園外研修モデル」にまとめ、配布することとした。

今後、この萌芽研究の成果を基に新たな幼保連携型認定こども園を構想することは、乳幼児期の保育・教育の質向上に大きく貢献するものと考えている。また、本研究で得られた成果は、認定こども園のみならず、乳幼児期の子どもたちへの保育・教育の場において、等しく共有できるものと確信している。

研究成果の概要（英文）： Focusing the perspective on understanding children and childcare from the records of kindergarten teachers and nursery teachers, we devised the training model for kindergartens and nursery centers to overcome traditional cultural barriers and put them into practice in certified centers for early childhood education and care. First conducting a survey of all teachers engaged in early childhood education and childcare in the city, we clarified the viewpoint of child understanding, which is the basis of mutual understanding between kindergarten teachers and nursery teachers, in other words a scale of attitude and stance of sympathetic involvement of the teachers. Secondly using this scale, we analyzed the changes in child understanding seen in the process of transition to certified centers for early childhood education and care. Lastly exploring the possibility, we constituted inside and outside training model in certified centers for early childhood education and care.

研究分野：教育学及び教育学関連分野

キーワード：子ども理解 記録 園内研修 保育者のかかわり 幼保一体化

1. 研究開始当初の背景

(1) 幼保連携型認定こども園移行に伴う幼稚園教諭と保育士の交流研修会において、保育の質向上を図るために、「ラーニング・ストーリー」を採用することとした。「ラーニング・ストーリー」とは、ニュージーランドの乳幼児教育課程である「テ・ファリキ」が提唱する保育の質を評価する基準である。「テ・ファリキ」では、子どもの今の生活環境に焦点を当て、「ラーニング・ストーリー」によって子どもの学びと育ちの成果を評価し、子どもとその家族が生活するあらゆるフィールドの環境改善への取り組みが実施されている。

(2) 学びの成果をとらえるアセスメントとして開発された「ラーニング・ストーリー」では、学びの構えである「関心を持つ」「熱中する」「困難ややったことのないことに立ち向かう」「考えや感情を表現する」「自ら責任を担う」という5つの視点から子どもを継続的に観察・記録していくものである。

(3) 「ラーニング・ストーリー」による記録は子どもが活動に参加していなくても、子どもの学びへの内面的構えを文章化によって掘り探ることで、活動への子どもの思いが浮き彫りにできる。保育者が活動における子どもの思いに寄り添い、次の保育環境整備を図ることで、予想した成果に加え、予想外な成果が引き起こされる。

2. 研究の目的

(1) 2015(平成27)年4月から子ども・子育て支援新制度がスタートし、認定こども園も全国的に増加してきた。認定こども園移行に伴う幼稚園教諭と保育士の交流では、幼稚園と保育所間に見られる文化・風土の違いを超えた子ども理解の共有が鍵となる。ニュージーランドの乳幼児教育課程である「テ・ファリキ」と「ラーニング・ストーリー」は1998年から乳幼児期の教育とケア政策に関するテーマ調査に着手してきた経済協力開発機構(OECD)も高く評価してきた。

(2) 三木市の合同研修会で保育者が子どもの活動をつぶさに記録しようと接近し過ぎて保育を妨害する事態を改善する方法として、「ラーニング・ストーリー」の学びの構えを用いて記録する方法を取り入れた。「ラーニング・ストーリー」の導入は、幼稚園教諭と保育士が相互の現場に対する共通理解を深め、保育者が子どもを理解し、保育の質を高める手段として活用できる機会となった。

(3) こうした結果を踏まえ、本研究では「ラーニング・ストーリー」を適用した幼稚園教諭と保育士の記録から保育を見る視点、ならびに子ども理解の変容を明らかにしながら、認定こども園での園内・園外研修モデルの構築を目的とすることとした。

3. 研究の方法

(1) 幼保連携型認定こども園の園内・園外研修モデルを構築するために、まず2年間の三木市での交流研修会の記録を基に、相互の現場に対する共通理解の実際ならびに、幼稚園教諭と保育所保育士の子ども理解の相違を解明する。

(2) 保育者間の相互理解の基盤となる子ども理解を明らかにするために、三木市の保育者381名の調査を行い、「保育者の共感的かかわりの態度・姿勢」尺度を作成する。

(3) 子ども理解の共有を基にした研修会の可能性を検証するため、三木市の認定こども園での園内・園外研修を実施し、研修モデルを構築する。

4. 研究成果

(1) 認定こども園における文化・風土醸成過程の解明

三木市初のB認定こども園を手がかりに、2年間の三木市での交流研修会・選抜研修での効果とともに、幼稚園・保育所が培ってきた文化・風土による幼稚園教諭と保育所保育士の子ども理解の相違を解明した。

交流研修会での「ラーニング・ストーリー」の導入は、保育士が幼稚園教諭の行動に囚われることから子どもの思いを読み取るようとする子ども理解へと変容させるきっかけとなった。また、他園で採った記録を

持ち寄り自園で話し合う選抜研修は、保育士たちに保育の状況を思い起こし、子どもの行動やその心の動きを探るとともに、観察者としてのかかわり方や感じ方を振り返ってみることの重要性を認識させた。

B 認定こども園でのインタビュー調査から、

(a) 4歳からの2年保育に慣れている幼稚園教諭にとって、乳児等との生活は当初、園庭や遊戯室の使用を時間的、空間的に拘束され、子どもの活動を制限する要因と捉えられたこと、(b) 養護面から子どもたちの生活を確立してきた保育士たちにとって、教育面のねらいの主旨を問う幼稚園教諭の口調は詰問的で不安や苦痛をもたらしたこと、(c) こうした言葉や文化の違いは、図1に示すような職員会議や研修会を通じた幼稚園教諭の養護面、保育士の主体性重視の教育への理解の深まりや、それを裏付ける子どもの姿により薄れていったこと、(d) それを文化・風土の違いを超えた子ども理解の共有にまで高めたのが、支援を要する4歳児が率先して取り組み始めた当番活動による歩み寄りであることが分かった。

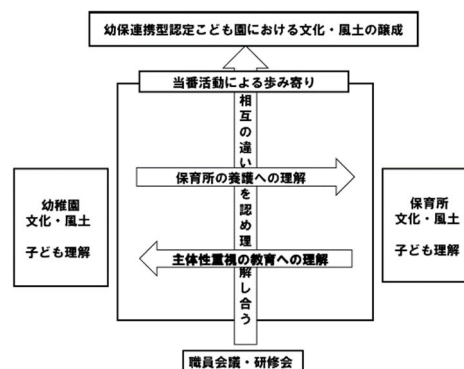


図1 認定こども園における文化・風土の醸成

(2) 記録を基にした保育者間の子ども理解の共有を図るための指標作成

保育者間相互の共通理解の基盤となる子ども理解の視点を明らかにするため、佐伯胖氏の「共感」「ケアリングの3次元モデル」を検討し、かかわり、共感、畏敬、向善性、ケアリングに基づかない子ども理解、という指標からなる「保育者の共感的かかわりの態度・姿勢」を理論的に作成した。さらに、作成した指標の妥当性を検討するため、三木市のすべての幼稚園、認定こども園、保育所、小規模保育施設などで働く全保育者381名に調査を実施し、子どもへの畏敬、ケアリングに基づかない子ども理解、共感的理解及びかかわり、子どもの向善性の肯定、の4因子からなる「保育者の共感的かかわりの態度・姿勢」尺度を開発した。

(3) 保育者間での子ども理解の共有を基にした研修の可能性の探索

「保育者の共感的かかわりの態度・姿勢」尺度を基に、保育者の記録分析や、関連する要因を分析する応用研究を行い、保育者間での子ども理解の共有とその可能性を探った。

2年間の三木市での交流研究会での記録を尺度の分析対象とし、子どもの内面理解のプロセスや保育者の共感的かかわりの実態を解明した結果、子どもの向善性の肯定が鍵となることが分かった。

また、「保育者の共感的かかわりの態度・姿勢」は、保育者としての経験年数により深まり、子どもの遊びのプロセスを評価する幼児教育の経験がよい結果をもたらすこと、日々の業務の忙しさの中でも、保育者が時間や気持ちにゆとりを感じる事が重要であること、人間関係において「前向きに生きる」姿勢が影響すること、などが分かった。

(4) 保育者の実践事例のドキュメンテーションとしての可能性の探求

保育者の実践事例を基に、保育者が子どもの育ちを語るためのドキュメンテーションを作成する試みと、子ども・保護者・保育者の三者をつなぐドキュメンテーションの可能性を探った。

三木市の認定こども園での園内研修を実施し、実践事例に基に写真入りのドキュメンテーションの作成を試みた結果、子どもの向善性を素直に描き出すことができ、子ども・保育者・保護者の三者をつなぐツールになる可能性が見出された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 木村直子	4. 巻 第51集
2. 論文標題 相互作用の重層性が生み出す保育環境の豊かさを評価する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鳴門教育大学附属幼稚園研究紀要	6. 最初と最後の頁 113 - 118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村直子・橋川喜美代・太田顕子	4. 巻 第18号
2. 論文標題 保育の質向上につながる子ども理解指標作成に関する一考察 - 佐伯の保育のケアリングを手がかりに -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鳴門教育大学授業実践研究	6. 最初と最後の頁 145 - 161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24727/00028418	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 木村直子・橋川喜美代・太田顕子
2. 発表標題 保育者の共感的かかわりの解明に関する研究（その1）
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 橋川喜美代・太田顕子
2. 発表標題 保育者の共感的かかわりの解明に関する研究（その2）
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 橋川喜美代・太田顕子
2. 発表標題 保育記録に見る子ども理解の深まりと園内研修 - 認定こども園への移行を推進する子ども理解と園内研修とは -
3. 学会等名 日本教育方法学会第55回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田顕子・橋川喜美代
2. 発表標題 園内研修における保育者の語り - 保育の質向上につながる子ども理解とは -
3. 学会等名 日本教育方法学会第54回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 太田顕子・橋川喜美代
2. 発表標題 幼稚園と保育所の文化をつなぐ幼児理解を求めて
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	木村 直子 (Kimura Naoko) (80448349)	鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授 (16102)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	太田 顕子 (Ota Akiko) (00636350)	関西福祉科学大学・教育学部・准教授 (34431)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関